僕の彼女はあの…

marta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の彼女はあの…

【Ｎコード】
Ｎ７６５９Ｙ

【作者名】
ｍａｒｔａ

【あらすじ】
いつも通りの生活を送る少年が美少女を助けたおかげでいろいろな事に巻き込まれれ、次第に彼女に惹かれていく…学園ラブストーリー

出会い。

今はいつも通り通学途中。
今日も学校だ。

僕は近頃、携帯小説といわれるモノにはまっている。

友達はバカにするが。
だから何だ？

彼女居ない歴＝１７年＝年齢

ハマるのも仕方ないだろ。

こんな幼馴染がいたらな、とか

運命の出会いとかないかなとか
を思いながら
近頃過ごしている。

１０分後に叶うとは知らずに…

ここは、学校の最寄駅。

いつも通り改札を出て学校へ向かう。
学校までは５分ほど歩く。
だが、今日はいつもの通学路とは少し違った。

僕が異変に気付いたのは３０ｍ先に見た目が「俺ら不良」と叫んで

いる、集団を見つけたからだ。

はぁー

絡まれなきゃいいや、と思いつつ素通りする事にした。
だが、よくみると、
真ん中にあいつらの友達とは思えない俗に言う美少女という女の子がいた。
というよりも、囲まれていた。

「ちょっと、やめてよ。」

「いいじゃん、俺たちひまなんだよ」

まあ、僕には関係ない。
こういう時は何をするか知ってるだろうか？

スルーだ。

進路の変更はない。学校へ

だが、好奇心という欲に負けてチラッと見てしまった。

ヤバイ…目が合った

不良と？　違う。
では…そう
美少女と。

目が合った
と、言うよりも見つめられた。
生まれつき、人の心を読むのに難がある僕であるが、彼女が僕に訴えかけていた事はわかった。
助けて…だ。
僕にも良心と呼ばれるモノはある。
ここで助けに行く事も出来る。
だが、めんどくさい。
助けたからといってなんのメリットがあるだろうか？
彼女になってくれるとでもいうのか？
期待するだけ無駄だ。
それに遅刻寸前だ…
しかし、待てよ
今日だけカッコいい事もしてみるのはどうか？と、誰かが頭の中でささやいた。
そうだな。今日だけ。いつか報われる。
そう信じて…
「おい。兄弟
いくらモテナイからって、
そこまでする事ないっしょ。は他から見て哀れみを感じるよ。」

自分でも
皮肉の才能あるなとつくづく思う

「は？何だお前？てか誰？」不良A
「カンケーないのは、学校イキナ」不良B
「ボコられたいの？」不良C

学校行った方がいいのは
お前らの方だろ（笑）

「もう一度言ってあげようか？
理解できてなさそうだから、
あ．わ．れ…」

いい終わらないうちに不良Aが殴ってきた。

出たよ、大きく振ってきた。
顔を横に傾ける。そして、足を掛け投げる。

今度はドロップキックときた。不良C
当たるギリギリまで耐える。
今だ。あのゲームで同じみ「緊急回避」というものをとった。
そして、Cの着地地点には倒れてるAが…

どかっ　A戦闘不能。

友達思いじゃないCを軽く蹴り、
C戦闘不能。

ふぅ。あと1人。って

逃げてるし（笑）ま、いっか。

現在8時27分。　ヤバイ遅刻。

バックをとり学校へと方向転換して

走り出そうとしたとき

「あの～ありがとうございます」ぺこり。

あっそっか。いたもう一人。

たしかあの子は…

そっか。助けたんだった…

「本当に、ありがとうございます」

静かに振り返ると、
そこには、茶色のロングヘアで長身のモデルみたいな子が立っていた。
よくみると、
本当にかわいい…
絡まれるわけだ。納得。

「け、怪我はありませんか？」
「特に無いから、
心配しないで。それより急いでるから
気を付けてね」
「ねぇ、お礼したいんですけど…
メアドだけでも教えて？」

お礼なら、早く行かせてくれ

「あー、本当にゴメン
学校行かなきゃいけないんだ」

そして、振り返らず全力で学校へ走りだした。
なぜ聞かなかったって？
だって、今日で3日連続遅刻だからさ。
さすがにまずいだろ…

その日は最悪だった。
生徒指導室に呼ばれ、反省文をたっぷり書かされもうクタクタだ。
明日は、１０分早く家出よ。
静かに目覚ましをセットした。

〜〜〜
あー眠い

てか今何時？
８時？まさか。目覚ましかけたはずなのに…

「おい
タケル（目覚まし時計のなえ）
何で起こさなかった？
あっ、電池切れてた…」

〜〜〜
ふぅ、間に合った。

今は朝日のＨＲだ。
席に着く。
「みんな着席〜知ってると思うけど、今日から転校生が来るから。
佐々木さん入って。」

へぇ、転校生くるんだ…

「おい。転校生って知ってた？」
「先生、前言ってたじゃん。

聞いてなかったの？女子らしいよ。」
今話かけたのは、前の席に座ってる一応親友って存在の田中。
「あっ、来たよ」
教室の男子からはコソコソ話声が
「やば、かわいくない？」
「マジだ」
彼女はこれから何回告白をされるだろう…
女子は
「キャーかわいー」
など叫んでる。
前を見る。
そこには、何処かで見た事ある顔が…
「今日から、ここに入る佐々木結衣さんです。みんな、仲良くしてあげてね。じゃあ何かひと言。」
「んーと、佐々木結衣です。
これからよろしくお願いします」
「「はーい。」」
「じゃあ席は、あそこね。」
「はい。」
やっぱり何処かで見た事ある。
確信は無いが…
えっ、こっちに歩いて来る。
「よいしょっと」

転校生がとなりの席にちょこんと座った。

「これからよろしく。」
ニコッと微笑みながら言われた。
「あっ、はい。」

そして、口パクで
「キノウハアリガトウ」
と言った。

茶色のロングヘア…
モデルみたいな脚…
小さい顔…

あぁーーーーーーーーーー

思い出したぁーー

隣に座った子は昨日の子だった。
それから、あの子とは今日話さなかった。
彼女が一日中質問責めにあっていたからだ。
まあ、自分から話かける勇気もつもりも無いが…

なぜなら、校内では噂の美少女だ。

予想外の出来事

ブー、ブー、携帯が鳴る。
「誰だよ？朝っぱらから電話する奴は？」
現在土曜午前１１時。大切な休日の朝を非常識極まりないない奴によって起こされた。
眠い。携帯を見てみると、知らない電話番号が表示されてた。
誰？
出るか出ないか迷ったが好奇心から出る事にした。
「はい。もしもし。」
「あっ、出た。もしもしー、起きてる？今日ひま？」
女子の声だ。
「今日は…暇だけど、誰？」
「あっ、そっか。番号知らないんだっけ？
私よ、私。ほら、金曜日転校して来たでしょ。結衣よ。覚えてないの？」
覚えてるけど、何で番号知ってるの？
「いや、覚えてるけど、何で番号知ってるの？交換してないよね？」
「それは、秘密。」
「じゃあ、１時に立川駅集合ね。」
「ちょっ、ちょっと待ってよ。俺いつ遊ぶって言った？」
「え、さっき今日ひまって言ってたじゃない。じゃあ、後でね。
ブチ」
「切れた…」
今どうなってるんだ？
大至急で頭を整理する。
あぁーーーわやなほむほみめ、や
大変だ。どうする？

行く？いや、わけわからん。
ドタキャン？それは、最悪。
行くしかないのか…
急いで用意する。
まずは、風呂入って、トイレして、歯を磨い…
さて、服はどうするか…
ジャケ？いや、そんな気分じゃない。
セーター？違う。
無難にパーカーにしとくか。
いろいろ迷った末、思いついたコーディネートを上から紹介しよう。
シャツの上にプルオーバー。
黒いジーンズを下折り曲げる。
ティンバーランド。
そして、黒ぶちの伊達メガネ。
どう？悪くないでしょ。
と、鏡に映る自分を勇気づけ家を出る。

現在１２時４５分前。ちょっと、早く来すぎたかな。
待ち合わせ場所は確かここだから、待ってればいいや。
イアホンを付けて音楽を聴く。

五分経過…

トントン。誰かに叩かれた。イアホンを外す。

「た、たくみ君？」
上目遣いで女子に見られてる…
蛇に睨まれたカエル状態だ。
「えっ、あっ、佐々木さん」
「あっ。良かった。何かいつもと雰囲気違うからわからなかった。」

いつもとって、二回しか見てないだろ…まあ、いいや
「いやー、よかったー。」
「何が？」
「いや、だって、来て…」
最後の言葉がフェードアウトしてて聞き取れなかった。
「えっ？ごめん。聞こえなかった。」
「えっ、来てくれないかと思ったの！何度も聞かないで…」
「あっ。ごめん。」
何で怒られなきゃいけないんだよ。
けど、良く見ると私服も可愛い。
赤いセーターがよく似合ってる。
「で、今日はどうしたの？」
「あっ、そうそう。私こっちに引っ越して来たばかりでしょ？
だから、この辺案内してもらおうかと思って。」
「分かった。けど、何で俺？」
「だって、前みたいにからまれたら、助けてもらえるように。」
そういう事か。なら俺じゃなくて、別の男子に頼めばよかったのに。
例えば、柔道部の高橋とか？
あいつならどこでもすっ飛んでくると思うし。
「わかったけど、何で俺？
別の男子も居たろ？連絡先交換してないの？」
「してないわよ。たくみ君以外。
私、いろいろな男子にホイホイメアド教えるような、軽い女じゃないわよ。ふふ。」
「わかりました。」
俺も交換してないぞ。思わず言いそうになった…
「で、どこ行く？買い物？映画？」
「んー、
見たい映画あるんだけど…。」
「わかった。じゃ、こっち。」

今日は日曜日ともあって人が多いな。
何か、今日は当人比１０倍もの視線を感じるのは気のせいだろうか…

「着いたよ。」
「あっ。ここか。」
「で、何が見たいんだたっけ？」
「あれ。」
「えっ、あれ？」
指の先には、レースの映画のポスターがあった。
「何か不満？」
「えっ、いや、特に何も不満じゃないけど。じゃ、チケット買いに行こう」
別に不満だったわけじゃない。
ただ、てっきり、
女の子だから恋愛モノを見るものとばかり思ってた。まあ、レース俺も好きだし、いいか。

「ねぇ、面白かったでしょ？あれ」
「あー、ごめん。寝てた。」
そりゃ眠いだろ、朝早く起こされたのだから。
「はぁ？何それ？
サイテー」
「はい。ごめんなさい。」
「まあ、いいわ。ねぇ、お腹空かない？」
確かに空腹だ。何故なら朝食べてないから。
「じゃ、マックでも行く？」
「うん。」

「いらっしゃいませ～
何になさいまって　えー？

匠じゃん？そして、えー？さ　佐々木さん？」

ヤバイ。
非常にヤバイ。何故ヤバイかって？
そんな理由一つしかない。
目の前にクラスメイトの鈴木がいるからだ。
しまった。鈴木がマックでバイトしてる事てっきり忘れてた…

どうしよう。このままだと完璧に誤解される…

「私達、幼なじみなの。」
ナイスフォローなのか？
「あっ。そういう事か。
で、注文は？」
良かった。納得してくれたようだ。
そういえば、あいつバカだったんだ。
「私、ビックマックとマックナゲットとポテトLで。あっ、あとオレンジジュース。たくみ君は？」
すげーカロリーだぞ？いいのか？
誰が見ても肥る事くらいわかるぞ？
「えっ、匠と一緒じゃないの？まあ、いいや。」
鈴木もびっくりしてる。
そりゃそうだ。男が頼むならまだしも、目の前で、注文してるのは女の子だぞ？しかも華奢で、美人な。
「じゃあ、ダブルチーズバーガーとコーラで。」

「ふぅ、お腹いっぱい。」
「まあ、そうだろうね。」
さっきから聞きたかった事を聞いて見る事にした。今聞かなきゃ夜気になって眠れない。

「一つ聞いていい？」
「なに？私に答えられることなら。
いいわよ。」
「いつも、そんなに食べるの？」
「んー、今日は少ない方よ。何か文句ある？」
「いや、ありません。」

ちょっと、今日は疲れたな。
そろそろ帰るかな
「じゃあ、帰るか？」
「そうね、家まで送ってくれる？」
「はい。わかりました。お嬢様。」
「ん？何か言った？」
「いえ、何も。」
睨まれた。ていうか、もう上下関係が確立されつつあるのか？
先が思いやられる…

「へぇ、家ここなんだ。結構でかいね。」
というよりも、ミニチュアの豪邸？
「そうかしら？
上がってく？」
「遠慮しとおきます。」
「そう。乗りが悪いわね。」
「何とでも言って下さい。」
「まあ、今日楽しかった
ありがとね。付き合ってくれて。」
「別に、いいよ。暇だったし。
楽しかったし。」
「本当？良かった。じゃあ、私と友達になってくれますか？」
「もちろん。じゃあね。」

「じゃあね」

あの子が家に…

ふぅ、今日も遅刻ギリギリ学校着。
だが、今日はいつもと雰囲気が違う…
すれ違う人みんな俺を見てこそこそ話している。
自意識過剰なだけだろうか…
ならいいけど…

「おはよう」

前に座ってる田中に声掛けながら席に着く。

「おっ、噂の匠くんじゃん。
おはよう」
「噂って…もしかして…」
「幼なじみなんだってな?匠と佐々木さん。」

なんだそれか。くると思ってたぜ。
そう思ってシナリオは昨日の夜に考えておいたのさ。
俺って、できる男（笑）

「そうなんだよ。てか、もしかして校内に広がってる?」
「当たり前だよ。で、いつから?
幼稚園?それとも小学校?」
「えーと、確か幼稚園だったかな?」
「へぇ、そうなんだ〜。で、どうなの?」
「何が?」
「だから、付き合ってるの?」

「はぁ？
まさか、付き合ってねーよ。」
「本当か？」
「あんな美人だぜ？」
「だな」

噂の美人が登場。
向こうも質問責めにあってある。

「へぇ、結衣ちゃんって匠くんと小学校が一緒だったんだ～」

ヤバイ。つじつまが合ってない…
明らかに田中も悩んでる。
来るぞー　来るぞー

「なぁ、お前さっき幼稚園からとか言ってなかったか？」

キター

「えっ、そうだったっけ？向こうは気づいて無いみたいだけど、実は幼稚園からだったんだ。」
「そういう事か。」

あぶねー。

「おはよう、昨日はありがと。
匠くん。ふふ」
「こちらこそ。」
「やっぱ、君たちそうゆー仲？」
「ちげーよ」

「ふふ。」
全力で否定。
てか、佐々木さんも微笑んでないで否定してくれ…

~昼休み~

腹減った〜

「おい、田中。昼食べようぜ？」
「オッケー」

田中が机を動かしてくっつける。

「私も一緒にいい？」

はっ？何言ってんの…佐々木さん

「え、どーぞ　どーぞ」

おい、田中ヤメろ。
確かに男にとっては最高に幸せなひと言だという事は百も承知だ。
だが、周りの視線というモノを考えて欲しい。

「「いただきまーす。」」

もう、遅かった…
仕方なく俺も朝買ったコンビニ弁を出す。

「いただきます…」

視線が痛くて美味しく食べれない。

女子→興味
男子→嫉妬

両方の意味でマズイ…

「匠くんってコンビニ弁なの？」
「えっ、あぁ
俺ひとり暮らしだから。」
「へぇ、それでコンビニ弁…
体に悪いわよ？」
「知ってる。」

その時俺は見逃さなかった。
彼女が何か思いついた顔をしたのを…

「こいつの親、世界を飛び回ってんだ」
「へぇ、そうなんだ~」

~放課後~

さぁ、帰るか。

「帰らないのか？田中」
「わりー、今日俺委員会」
「そっか。」
「うん。またな」

ひとりで帰るか。

確か、冷蔵庫の中何も無かったな。
買い物してくか。

「ねぇ」

「ねぇってば」

んっ、俺か？振り返る。

「無視しないでよね」
「悪い。そんなつもりは…」
「ねぇ、一緒に帰ろ？」
「誰と？」
「はい？誰って、目の前にいる人よ」
「俺？」
「そう。あなた」
「んー、今日買い物していかなきゃなんないんだ。」
「うそっ、じゃあ、私の得意分野ね。
行きましょ」ニコッ

はぁ　抵抗しても無駄か…

~家~

「ねぇ、冷蔵庫開けていい？」
「好きに使って」

何で彼女が家に居るかって？
言わなくてもわかるだろう。
今日の夕飯は私が作ると言い出したからだ…

こんなとこクラスの奴に見られたら…
想像もしたくない。

「「ごちそうさまでした」」

ちなみに鍋だった。
そして、佐々木さんは料理が上手だった。

「匠くんの家って筋トレジムみたいね」
「そうか？まぁ、トレーニング用品しかないな。」
「ゲームとかしないの？」
「んー、しない。小説は読むよ。ほら。」

本棚を指差した。

「うわぁ、結構読むのね。」
「近頃は、携帯小説にハマってるけどね。佐々木さんは本読むのか？」
「私？たまにね。携帯小説って、運命の出会いとかに憧れてるわけ？」

図星だ…

「俺の自由だろ」
「ふーん」
「何、にやついてんの？」
「別に~。今何時？」
「んーと、9時前」
「もうそんな時間か…じゃあ、帰るねー」

「あっ、駅まで送ってくよ」
「おっ、紳士だね~」
「やっぱ、やめた」
「ごめーん。」
「はいはい。」

2人で駅まで歩く…

「ねぇ、匠くんって武術とかやってるの？」
「ひみつ」
「ひどーい」
「鍋美味しかったよ」
「えっ、ありがとう。どう？お嫁さんにしたい？」
「優しい子がいい。」
「なにそれ？じゃあ、明日はコンビニ弁当買わなくていいからね。じゃあね」
「じゃあ…」

いい終わらない内に走って改札に行ってしまった…

どういう意味なんだ。

もしかして…もしかしてか？
やめてくれーーーーー
それだけはやめてくれ。

うぅ、胃が痛い…
家帰って寝よ。
明日にならないで…

保健室

ダメだったか…
何がダメだったかって？
今日という日が来るなって願ってたんだよ。

～昼休み～
ふぅ…これで四時間目も終了。
さて、そろそろだな…
朝、電車の中で思いついた作戦でも実行しよう　フフ（ー｀ー）
佐々木さんは、と居ない…多分まだ体育館から帰ってきてないんだろう。

今しかない…

「うぅ」
「どうした？匠？」
と、びっくりした田中。
「な、なんか頭痛が…そして、寒気が…
多分、朝のアイスだ…」
「朝からアイス食ったのか？
そりゃ、まずいだろ…
保健室行きなよ。」
「だな、そうする…」

頭を抱えながら保健室へ。
フフ（ー｀ー）
「すみません…風邪引いたみたいなので、ベッドで横になってもいいですか？」

「あらー、大変ねぇ。ゆっくりしていって。」
保健室の先生はやっぱ、優しい。
お嫁さんにするなら、こういう人じゃなきゃ…
ここに居れば彼女と昼食を共にすることもないし。
けど、腹減った…
教室でみんなの視線を浴びながら愛妻弁当を食べれるほど、度胸はない。
てか、彼女じゃねーし。
いいや、寝よ…

〜〜〜

チリリリーん
ガシャ。

はぁ、眠い。

今日も仕事かぁ…憂鬱
階段を寝ぼけながら降りて行く。
キッチンのテーブルにはパンと目玉焼きが…

「あっ、起きたの？たくちゃん
ごはんできてるわよ。」
「おっ、今日も美味しそうだね。
マリは？」
「まだ、寝てるわよ。今日ゴミ出しよろしくね。」
「わかったよ。舞。」

ねぇ

どこからか声が…

起きてよ

まただ…

バシっ

〜〜〜

はっ？何だ夢か…

久しぶりに思い出したな…舞。

「ねぇ、起きた？」

目の前には佐々木さんが…

「田中君がたくみくんが熱出したって。　大丈夫？何かしてあげれる事ある？」

そうだな…あれしかない。

「苦しい…降りてくれ…」

状況を説明すると、彼女が寝ている僕の上に座っているのだ。

一応、病気って設定の人間だぞ。

「あっ、ごめんなさい…」

「別にいいよ。でもどうしてここに？」
「さっき言ったじゃない。風邪ってきいたから。
あっ、ちょっと待って…」
「はい。これ。」
「何？」
「お弁当よ。昨日作るって言ったじゃない。朝作ったの…」

良かったー
保健室に居て。
教室だったら注目の的だぞ…気絶してしまう。
だけど、生まれて初めてだ…
女子の手作り弁当。
携帯小説ではよく見たけど…
本当にこんなモノが現実世界に存在するとは…
しかも目の前に…
俺のための…

「本当に作ってきたんだ。」
「私は有言実行な女よ。まぁ、食べてみて。」

結構お洒落な弁当箱だ。

「開けていい？」
「もちろん。たくみくんのよ？」

中には、唐揚げ、卵焼、生姜焼きなど大好物がキレイに詰まっていた…

「いただきます。うっ。」
「えっ？もしかしてマズイ？…」

いや、最高だ…最高にウマイ。

「ウマイ。てか、最高。」
「良かったぁ。えっ、もう食べ終わったの？」
「えっ、ダメだった？」
「ダメじゃないけど、早いなって…」
「うまかったから。」

うつむいてしまった…
どうしよう…俺何かしたかな？

「さ、佐々木さん？」
「はっ、ごめんなさい…嬉しくって…涙でちゃった。」

案外純粋な子なんだな…泣き顔もかわいい。
ポケットからハンカチを出す。

「はい。」
「ありがとぅ。ズー」

おい、鼻かむな！
まぁ、いっか洗濯すれば。

～家～
今俺は学校から帰って来て家で筋トレをしている。一応、体格には自身がある。１７７ｃｍ。７３キロ。体脂肪９％。

ふあー
疲れた…ちょっと休憩。

ピンポーン

宅配便か？

「はい。今行きまーす。」

何か頼んだっけな？

ガチャ

えっ？戸を閉める…ガチャ

これは頼んでないぞ。

「ちょっ、ひどいじゃない。閉めるなんて。入れてくれないと叫んじゃうわよ？助けてーって。」

それだけはやめてくれ…開けるから

ガチャ

「最初からそうすればいいのよ。お邪魔しまーす。」

そう、佐々木さんだ…

「で、今日は何？佐々木さん。」

「はい、ストップーそれダメ。」

「何が？」

「さっき言った言葉もう一回言って」

「今日は何？」

「それじゃなくて、その後」
「何か言ったけ？」
「もー、私の呼び方。」
「呼び方？」
「だから、その「佐々木さん」よ」
「それをどうしろって？」
「変えて。」
「どこをどう変えるの？」
「はぁ…私の事を名前で呼んで欲しいの。「結衣」って。」
「イヤイヤ、無理だよ。誤解を招くって…」
「呼ばないと、たくみくんに言い寄られてるって、学校の人達に言うから。」

薄々気づいてたけど、この子小悪魔？

「わかった。呼べばいいんでしょ。
だから、根も葉もない事言わないでよ」
「それで良い。では、始めから。」

はあ、疲れる…

「でぇ、今日は何？ゆっ、結衣」
「よろしい。今日泊まるから」

はあ、なにイッテンノこの子？

「今日、親が旅行で私独りなの。泥棒とか入ってきたら怖いなぁと思って。
いいんでしょ？」

この子には何言っても無駄だ…

「はいはい。好きにしてください」
「やった～ふふ」
「俺、風呂入ってくる。くつろいでて」
「はーい」

～風呂上がり～

彼女は前に録画して置いた映画を見ている。

「夕飯食べた？」
「えっ？私？気にしなくていいわよ」

グゥー

「ウソです…お腹ペコペコです」

俺、失笑。

「実は俺もまだだから、ピザ取るよ」
「本当に？良かったぁ」
「頼んでおくから風呂入ってきなよ」
「そうね。よろしくね」

～夕飯後～
「ふぅ、何か眠たくなってきちゃった…私寝るね」
「じゃあ、俺のベッド使って」
「えっ、いいの？たくみくんは？」
「俺、何処でも寝れるから。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」
「電気消すよ？」
「うん。」

「ねぇ、たくみくんって彼女とかいるの？」
「俺に？まさか。いない。」
「じゃあ、好きな子は？」
「んー、わかんない。佐々木さんじゃなくて、結衣は？」
「ひみつ」
「はいはい。おやすみ」
「おやすみぃ」

ますますわかんないぞ
この子の事が…

水族館

土曜日の朝。

ふぁ。眠い…んっ、目の前に人の顔らしきものが…
部屋のアイドルのポスターでも剥がれたのかな？
いや、違う。僕の部屋にそんなものは無い…
目をこすり焦点を例のモノに合わせる。
佐々木さん？何で…
寝起きの頭をフル回転させる。

状況がわかった。

昨日彼女が家に泊まりにきた。
僕のベッドで寝た。
下で寝ていた僕の目の前に落ちてきた…ということか。
そして、僕はいったい何時間、目の前の美女の顔と直線距離にして
１０ｃｍの所で向かい合って寝ていたのか…
僕も一応、男の子だぞ。
まあ、寝かせとくか。寝顔かわいいし…

～午前９時～

「おはようぅ　　ふぁ」

彼女が起きてきた。

「お、起きた？ちょうど、朝ごはんできたとこだよ。」

「えっ、料理出来るの？たくみくん」
「一人暮らしだよ？それなりには…」
「感心。感心。って、シリアルじゃん（笑）」
「文句あるなら食べなくていいよ？」
「ありませーん。いただきまーす」
「今日どうする？たくみくん行きたい所ある？」
「んー、特に無いな…」
「じゃあ、水族館行かない？」
「水族館かぁ、いいかも。」
「じゃあ、決まり。１１時出発ね。お風呂借りてもいい？」
「１０００円ね。」
「たくみくんの家に無理やり連れ込まれたって、みんなに…」
「はいはい。タダです。」
「よろしい。覗かないでよ」

するわけ無いだろ。後が怖い…

～水族館～
水族館なんていつぶりだろう…
小学校の時に遠足で来た以来かな。それにしても、混んでるな。土曜日だから仕方ないか…
それに、視線もすごいな…
すれ違った人は7割の確率で振り返って見てくる。
僕ってそんなに目立つかな…
違う。となりのあの子だ…
雑誌の表紙にモデルとして写っていても誰も文句を言わない美貌だ。
周りからどう思われてるんだろう？カップルとか？
僕みたいなのがこんな子彼女にできるわけ無いだろ。常識で考えろ
常識で。
チケットを買って入場する。なんか、ワクワクしてきた。僕って案

外子供？
だが、となりには近くの小学生に負けず劣らずはしゃいでる高校２年生がいる…
世のかにはこんな子もいるから大丈夫と密かに安心した。

「何？私の顔になんかついてる？」
「別にぃ」
「何っ？言って」
「鼻毛が…」
「ウソ？えっ、本当？ちょっと待って　　もうやだー」
「嘘。」
「サイテー。乙女心を傷つけた代償は大きいわよ」
「ごめん、ごめん。で、いくらくらい？」
「プライスレスよ」

とんでもないものを要求されそうだ…

今は全館観終わって売店にいる。もう体力は無い…彼女はまだはしゃいでる…

「コレ可愛くない？」
「うん。いいんじゃない」

と、ストラップを掲げて見せてきた。正直、早く買い物を終わってほしい。かれこれ３０分以上付き合っている…女の人の買い物は長いって聞いたことが、あったけど本当だ…

「買ってあげるからそろそろ行こう？」
「もしかして、もしかしてのプレゼントってやつ？しょうがないなぁ、受けとってあげる。」

「はいはい。」

好意を得るためのプレゼントでは無い。僕の体力を気遣ってのプレゼントだ。

～帰り道～

「今日は楽しかったぁ

また来よ！」

「いつかね…」

「もしかして、つまんなかった？」

「いや、楽しかったよ。ただ、クタクタ…」

「体力ないなぁ」

まずい…

その時僕は気付いた…

前からＤＱＮ達が歩いてくるのを…佐々木さんを観ながら…

なんだろう。この気持ち…

非常まずい…
前から赤い頭、青い頭、黄色い頭…て、信号じゃん（笑）
が歩いてくるのだ。こっちを見てこそこそ笑ってる…
何か企んでる顔だ。
こういう時はどうする？
迷いは無い…

逃げる。

佐々木さんの手を掴み全力で走る。初めて手を握ったかも…

「ちょっ、ちょっとどうなってるの？」
「いいから。」

彼女は気付いてないらしい。
案の定、追いかけてきた。
おい、だのコラだの待てだの言いながら追いかけてくる。
待てって言われて待つ奴がどこにいる？

「そういうことね。」
「やっと気付いてくれた？
そこ、曲がって」

何回か曲がって細い路地に入った。もう、追って来ないらしい…ふぅ、一安心。

「怪我はない？」

「うん。特には。たくみくんは？」
「僕は平気」
けど、ここはどこだ？夢中で走ったから場所が、わからない。見たこと無い場所だ。
「ここどこかな？」
「いいじゃない。どこでも。ふふ」
何か楽しそうにしてる…
「ちょっと探検しよう。」
「あっ、あぁ」
探検って僕たち迷子だぞ…
「あっ、見てあれ」
「えっ」
彼女が指指す先にはお洒落な隠れ家的なカフェがあった。
「入ってみる？」
「うん。入りたいなら」
ガシャ
木でできた重い度合いを開ける…すごい…
ドアの中の世界は不思議な国のアリスの世界だ…
「いらっしゃいませ。お二人様ですね？では、こちらへ。」

案内された席はテーブルにロウソクが照らされロマンチックな雰囲気をかもし出していた。
こういう所って、カップルで来る所だよね…多分。
店員さんも僕たちを見ている。
そりゃそうだ。目の前にいるのは、超がつく程の美女がいるのだ。
この時だけ僕は優越感というものに浸った。だけど、君らが想像しているような関係ではない。

「へぇー何か、すごいカフェ見つけちゃった。」

僕はコーヒー。佐々木
さんはチーズケーキとガトーショコラを頼んで食べた。もちろん、味は最高。
ふと、目の前の子を見た。
いつ見てもかわいい…よく整った顔…サラサラのロングヘア…

「な、何？」
「いや、良く食べるなぁって。
話変わるけど、なんでここに転校して来たの？」

危ない。かわいくて見とれてたなんて口がさけても言えない…

「パパの転勤。」
「へぇ。けど、君の家の近くにも高校あるじゃん。何でわざわざ遠いこっちの高校に来たの？」
「秘密よ。ヒミツ　ふふ」
「はいはい」

秘密の多い子だ。

～成城駅～
店員の人に道を聞いてようやく近くの駅に着いた。
今日はここでお別れだ。
長い一日だった。彼女と出会って一週間も経っていないのに、いろいろな事に巻き込まれてる。だが、そんな日常を楽しんでる自分がいる…

「私、上りだから」
「僕は、下り。じゃあね」
「うん。今日はありがとね。」

駅の改札口を出た所で別れる。

なんだろう、この気持ち…
この気持ちを言葉で表現するとなれば　　寂しいかな…

「あーっ」

後ろから悲鳴が聞こえた。
まさか、佐々木さんか？
急いで振り返る。

「落としちゃったみたい…
今日水族館で買ってもらったストラップ…」
「あー、逃げてた時？いいよ。ままた買ってあげるよ」
「でもぉ、初めてのプレゼン…」

また語尾がフェードアウトして聞こえなかった。

「初めての何？ごめん、聞こえなかった」
「聞かなくていい」
「ご、ごめん」

何で謝るんだ？僕は…

その日は帰ってすぐ寝た。
起きたら日曜日の午後5時だった。せっかくの休みを無駄にした感じ…

起きてから家の大掃除をした。何故したかって？
明日になればわかる。来客があるからだ…超大物の。

はあ、栄養ドリンク飲まなきゃ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7659y/

僕の彼女はあの…

2011年11月29日21時52分発行